

風景心境

台灣近代美術文獻導讀

下

顏娟英……譯著 鶴田武良……譯



國家圖書館出版品預行編目資料

風景心境：台灣近代美術文獻導讀／顏娟英譯著．

-- 初版 -- 臺北市：雄獅，2001〔民90〕

冊： 公分

含索引

ISBN 957-474-022-6（平裝）

1．美術-臺灣-日據時期(1895-1945)-史料

2．美術-目錄

909.232

90004162



雄獅叢書02-010

風景心境—台灣近代美術文獻導讀（下冊）

譯 著 顏娟英

譯 者 鶴田武良

發行人 李賢文

企劃編輯 陳玉金

執行編輯 王昭華

美術編輯 曹秀蓉

封面設計 王小美

校 對 黃琪惠、邱函妮、林盈男、雄獅編輯部

出版者 雄獅圖書股份有限公司

地 址 106台北市忠孝東路四段216巷33弄16號

電 話 (02)2772-6311

傳 真 (02)2777-1575

郵撥帳號 0101037-3

E-mail lionart@ms12.hinet.net

法律顧問 黃靜嘉律師、聯合法律事務所

排 版 凱立國際印刷股份有限公司

製 版 沈氏藝術印刷股份有限公司

印 刷 沈氏藝術印刷股份有限公司

定 價 2400元

初 版 2001年3月

行政院新聞局登記證局版臺業字第0005號

ISBN 957-474-022-6

本書如有裝訂錯誤或缺頁，請寄回更換

有著作權，翻印必究

贊助單位：財團法人國家文化藝術基金會

風景心境

台灣近代美術文獻導讀

下

顏娟英……………譯著

鶴田武良……………譯

出版序

半分の台湾人、全き文化人

李賢文

日本統治時代の台湾を回顧するとき、台展と府展との十六回の美術展覧会は疑いなく台湾美術の中心であった。大多数の画家は、この展覧会を才華と努力を示す一年一度の舞台とした。近代台湾の美術文献の中で、我々は日本人美術家の先輩たちがどのようにして台湾のローカル・カラー画風のために努力したか、その痕跡を見出すことが出来、また台湾の青年画家が芸術のために精進する態度を見出すことが出来る。さらに画家、評論家の展覧会に対する率直で懇切な感想と意見は、同じ様に十分深刻な印象を与える。長期にわたって台展、府展の審査を担当してきた郷原古統、木下静涯、石川欽一郎、塩月桃甫、さらに画家の立石鉄臣などはみな、台湾美術近代化の重要な推進者であったということが出来る。そして彼らの台湾を熱愛する心情はその文章と画作の上で十分に反映されている。もしも我々が心を開いて彼らを「半分の台湾人」と呼んでも、彼らは多分認めてくれるであろう。筆者が一九七九年東京で立石鉄臣を訪問したとき、立石は私の往訪に対して異常な興奮を示し、台湾は彼の第二の故郷であるといい、且つ自ら半分の台湾人と称した。立石鉄臣は生前いつも台湾に遺した大量の作品を心に掛けていて、それらの作品が人々の気持ちを潤すことを心から望んでいた。私が思うに木下静涯、塩月桃甫、石川欽一郎などもきっと同じ様な期待を持っていたに違いない。文学者吳濁流はかつて一九七一年、詩を作って立石鉄臣に贈った。

画伯臨別時

以画贈故知

我本愛其画

深淺独得宜

紙上走龍蛇

丹青妙且佳

朝夕看不厭

情致如梅淡

比柳更有情

筆端巧入神

懸在書齋上

猶如伴故人

この詩はあたかも台湾人の、幾人かの日本人画伯に対する共通の感懐のようである。もしも我々が、彼らの作品をよく受け継いで台湾美術の不可分の一部分とするならば、台湾美術は必ずいっそう豊かで美しいものとなるであろう。

真の文化人は、往々国籍と地域の制約を超越し、彼が居住する土地に愛情を注ぎ、その生涯の総てをその地とその地の人々に捧げるのである。文学家西川満は一生を台湾で外地文学の発展につくした。彼はまた、台湾の青年知識分子は往々にして自己の民族が有している文化を軽視していると指摘した。「第一の蕃通」と称された森丑之助は、理蕃政策のもとで迫害を受けていた東埔布農族を助けようとひたすらに考えたが、しかしなかなか朝野の支持を得ることが出来ず、苦悶のあまり遂に海に身を投じて自殺した。画家塩月桃甫の第六回台展出品作品「母」は、台湾近代絵画史上きわめて稀な植民地統治の悲劇―一九三〇年十月の「霧社事件」を反映したもので、作者は当局の立場を飛び出して、純然たるひとりの個人的で率直な画家として表現したのである。これらの僅かな例証は、我々にこのような「半分の台湾人」はつまり全き文化人であると敬意を表させることを禁じない。

戦後に来台した美術家、例えば溥心畬、余承堯、于右任、臺靜農、沈耀初、席德進などは所謂「外省人」であるが、しかし彼らが台湾での後半生に示した作品風格と人文品格は、全き文化人と称するに足るものであった。もしも地域的な狭い考えでこの様な文化人を排斥したならば、台湾はこれまでの成果をさらに積み上げることが困難である。翻って見るに、フランスはいつも傑出した文化人、例えば多くの人がよく知っているスペイン人ピカソ、ミロ、またソビエト・ロシアのシャガール、あるいは中国人として初めてノーベル文学賞を受賞した高行健などを受け入れて自国の国民とし、それがために文化大国となったのである。意識形態の執着を放棄することによって、台湾ははじめて文化上の小さな枠から抜け出すことができ、さらに進んで新しく且つ優れた文化を包容し、本来の文化伝統を豊かにし、はじめて文化の上で広々とした大国となることが出来るのである。

高齡八十歳の中央研究院台湾史研究の院士曹永和は「台湾島史」の概念を提出した。彼は台湾史

研究の焦点を伝統的な特定の族群から、台湾島を基本的なひとつの空間単位とし、さらに島上のすべての人々を関心の対象とし、長い歴史的な観点から台湾史発展の全体の様相と豊富な内容を研究した。顏娟英教授の編著にかかる『台湾近代美術文獻導讀』は、疑い無く「台湾島史」研究を深め広げるのに役立ち、また大陸中原思考と辺境島国の思考の混乱から抜け出ることを助けるであろう。

今年はまだに雄獅美術三十周年に当たる。長期にわたって美術文化に従事してきたひとりの工作者の立場から言えば、この一組の中日両国語による文献と導讀を出版することは、極めて光栄なことである。本書は台湾美術の見方に新しい視野を開き、また台湾と日本の学術文化交流を促進することと深く信じるものである。

二〇〇一年二月 清泉草堂にて

訳者序

台湾近代美術の指針

鶴田武良

本書の刊行に当たって、台湾近代美術研究についての感想を記して序文に替えたい。

私が台湾近代美術——いわゆる日治期台湾美術に初めて関心を持ったのは一九七八年のことである。一九七三年から日本国内の主要図書館を対象にして続けていた近百年来中国画人資料の搜集に一区切りがついたのを機に、一九七八年夏、林維源記念文化財団の招聘を受けて、約三週間台北に滞在した。国立台湾大学、国立中央図書館での調査が主な目的であった。その頃は、ちょうど一九四九年前後に大陸から移ってきた画家たちが青年時代の追憶文を盛んに発表し始めていた時期で、本来の目的である近百年来中国画人資料の収集も一定の成果があった。しかし、最大の収穫は、その半年ばかり前に『藝術家』の連載が終わっていた謝里法著『日據時代台湾美術運動史』を手にしたことであらう。

中国絵画史研究者として真に恥ずかしいことであるが、その時まで私は台湾近代美術について何も知らなかった。石川欽一郎の名も台湾美術展覧会のことも知らなかった。その時は、近百年来中国絵画史研究が一段落したら、私なりの視点から台湾近代美術発展の跡を振り返って見たいと考えたが、いつ実現できるとも分からなかった。東京に帰ったその日八月十二日、北京で日中平和友好条約が調印されたが、それ以後は国立の研究所に身を置く者には台湾への渡航にさまざまな形で制約が加えられたし、また近百年来中国画人資料の作業で手一杯であったから、頭の片隅に台湾近代美術を置きながら、何も出来なかった。

一方、台湾では台湾近代美術の研究が着実に進んで行った。それだけでなく李沢藩、李梅樹、楊三郎など台湾第一世代画家の記念美術館の開館、また現代的画廊の開設が相次いで、研究環境も整

備されてきた。

なかでも、一九九八年秋、顔娟英博士の『台湾近代美術大事年表』を手にしたときの驚きは忘れ難い。私自身はその前年の春に『中国近代美術大事年表』を刊行したばかりであったから、対象とする時間と地域が限定されているとは云え、原資料を網羅するために顔博士がどれほど多くの精力と努力を傾注されたかがよく分かった。行き届いた編集と装幀にもしくは羨望の気持ちを禁じ得なかった。

台湾近代美術を振り返りたいという希望は、交流協会の一九九九年度歴史研究者交流事業に採択されて、漸く実現することが出来た。九九年七月、中央研究院歴史語言研究所に顔博士を訪れると、ちょうど日本統治期の新聞、雑誌から集めた画家の台湾風景印象記、台湾美術展批評、画家の美術論、台湾画壇回顧などの日本語文献を中国文に翻訳する作業が進められているところであった。それからの二カ月間、毎日午後をそのお手伝いに当てた。それら戦前の文章の中には極めて晦渋であったり、現在では死語となっている言葉が使われていたり、あるいは見慣れない英、仏語のカカナ表記が交ざっていたりして、日中戦争勃発の年に生れた私でも容易には理解し難いものもあった。もし中国語訳文に誤りがあれば、それは私の責任である。結局、作業は夏の二カ月だけでは終わらず、秋、冬、さらに二〇〇〇年二月と、あわせて四カ月近くかかったが、その作業に参加することによって私自身は文献や資料を一から探すという基礎作業を免れることが出来ただけでなく、通常よりも注意深く読むことよって理解を深めることができたし、その作業を通して多くのことを顔博士から教えられた。ひさしぶりに楽しく、充実した日々であった。

本書に収載された百三十七篇の文章は、日本統治時代に台湾及び日本内地で発表された、台湾近代美術に関する文献約千三百篇から選び出されたものである。本書によつて我々は、台湾に近代美術の種を蒔いた日本の画家たちが台湾の人々に注いだ暖かい眼差しと台湾の風土、自然に対する愛情とを改めて発見するだけでなく、日本ではあまり知られていない台湾美術展覧会の歴史と内容、当時の台湾美術界の状況、台湾の青年美術家たちの切磋琢磨する様子などを具体的に知ることが出来る。とりわけ印象深いことは、画家たちの年齢差と立場を超えた真剣で厳しい相互批評と論争とである。さらに本書は日本統治期の台湾の文化と社会、またそこで営まれた人々の生活の一面をも

伝えている。単に台湾近代美術研究だけでなく、日本統治時代台湾の研究にも裨益するところが大きいであろう。

加えて、七章それぞれに附された顔博士の行き届いた導読は、ただ各章の勝れた手引きであるだけでなく、それ自体ひとつの台湾近代美術論であり、また我々の台湾近代美術に対する理解を深めてくれる内容となっている。

本書は顔博士の『台湾近代美術大事年表』とともに、台湾近代美術研究に必需の二大図書として不朽の生命を保つであろう。

次に顔博士がこれまでに収集された千三百余篇の文献について、その『目録』の完成を期待することは望蜀であろうか。

本書の刊行を慶祝するとともに、これが機となって日本の近代美術研究者に刺激を与え、日本においても台湾近代美術研究が進むことを期待したい。

二〇〇一年二月

著者序

美術文化の記憶庫

顏 娟英

台湾に生れて、私は彫刻家黄土水と同じように強烈な不安感を抱いている。台北南港の中央研究院で、私は芸術史がまだ発展しないままに消滅するのではないかと憂慮している。台北の街の中で、教室の中で、私はいつもこれからの読者を待ち受けている。この愛する島を離れる時、私は人々が私がどこからやって来たかよく知らないことがいつも気がかりである。

十数年来、研究院での私の研究仲間は考古学者であった。彼らは皆相当な自信家であり、私は彼らから多くのことを学んだが、とりわけ台湾考古学がそうであった。数年前、研究院で台湾考古学百年シンポジウムが開催された。発表された論文は抜きん出っていて、論評もまた精彩であった。なぜ台湾考古学は百年以上の歴史を称することが出来るのだろうか。私は遠く九州大学からやって来た人望厚い国分直一教授と彼の教え子の総白髪台湾大学宋文薰教授を眺めながら、心に敬慕の思いが湧き出てくるのを感じた。中央研究院と台湾大学はともに一九二八年の成立である。台湾考古学が百年の歴史を持つならば、それはこの二人の教授の伝承と記憶によるもので、我々の歴史は最も早い日本人類学者が台湾にきて調査した足跡に溯る。

歴史は人類の記憶庫である。文化もまた、人々による学習の累積によって記憶となって、はじめて進歩することが出来る。記憶の中には想像的空間があり、また繰返し修飾と改造を受け入れることが出来る。歴史の重要性は時間の長短にあるのではなく、豊富な生命力の有無にある。集団の記憶庫が貧弱なときは、生活もまた興趣を失う。新興民族はすべて一生懸命に外に向かって学習し、経験を借りて速やかに記憶庫の容量を増そうとする。台湾の社会文化の様相の変化の急速なこともまた、この種の現象ではないだろうか。

台湾考古学は二人の老教授から日本統治期の歴史を傳承し、記憶もそれによって増加した。ところが、美術史学はこのようなキー・パーソンを欠いている。従って、台湾の記憶庫、つまり知識庫にはまだ大きな空白が残されている。このような空白のために、我々の生活は貧しく感じられ、私の自信も時に動揺を免れ難い。

「翻訳は文字によってあなた自身をこれまで行ったことのない場所に連れて行く」これはフランスの第十大学教授、翻訳学者パスキエールの最近の言葉である。本書に収めた百三十七篇の翻訳文は、つまり我々の記憶力と想像力を広げさせる資料庫であり、同時に我々に石川欽一郎、塩月桃甫、立石鉄臣との対話の可能性を提供してくれるものである。しかし実際は、彼らの時代は我々からまだあまり遠く隔たつてはいない。宋文薰教授は戦後京都から台北に帰って台湾大学に在学しているとき、画家立石鉄臣を知り、忘年の交を結ぶに至った。

しかし、文字の障害のために、我々は五十数年前に起きたことを完全に記憶庫から「削除」してしまっていた。これらの中国語に翻訳された文章を通して、ちょうどコンピュータの「復元」キーを押すように、奇跡が出現し、死亡していたも同様な記憶が再び新たに蘇ることを私は望む。台湾の文化知識庫はまさに急速に成長している。

異なった文字を翻訳して、完全に原作者の気持ちを伝えることは不可能なことである。しかし私は、読者がゆつくりとこれらの文章を読む時、あたかもひとつの巨大な歴史の記憶庫に入って、遺されていた大きな宝箱を開けるように、一人びとりが楽しい想像空間を探し当て、元来はかつて台湾で生活し、また創作していた多くの人々と知り合いになることを期待したい。彼らは久しく忘れられていたが、しかし彼らの誠実な考え方、美術創作に対する拘り方は、現在から見ても依然として新鮮である。

今日の読者の閱讀に便利なように、本書は七章に大きく分け、各章のはじめに一篇の導読を置いた。当然ながら、このように分割することは実に困難なことであった。本書は一九〇七年から一九四三年まで、約百人の作者の考え方を包括している。これら七篇の導読の執筆には前後一年の時間がかかった。第一篇の「風景心境」を書き終えた時、私はこれらの多くの文章を全面的に消化し、

抽出しようという考えを捨ててしまった。風景は大自然に限らない。これはずっと以前、私が劉啓祥の静物画について書いたとき、とりわけ強く感じたことである。室内風景、チェロのある風景などはすべて風景画になる可能性を持っている。風景心境という意味は、我々が見ている風景を心境の反映とし、心境はまた風景の反射であることを指している。我々の心霊と大地の脈動が同じリズムを奏するとき、あなた、私、彼、現在と昔の区別はすべて消失してしまう。天地はひとしなみで、渾然として我を忘れるのである。私は読者と同じような気持ちを持ちあわせ、一緒に閲読し、これらの文献を理解し、我々の心霊記憶の一部としたい。

日本語文献を中国文に翻訳する作業では、まず第一に私の父和永に感謝しなければならない。十数年前、たまたま家に帰って新年を迎えたとき、私は父に頼んで日本語を読みはじめた。それは親子の間の遊戯であった。自分で日本統治期の美術史文献の翻訳に着手したのは、およそ一九九〇年、京都大学人文科学研究所招聘研究員の時であった。翻訳がいつの間にか身についた習慣となっていて、いい文章、あるいは重要な文章に出会うと、中国語に翻訳しないわけにはいかないと感じた。同時に私は授業で翻訳の重要性を強調した。学生の羅秀芝、王淑津、黃琪恵は論文執筆にかかる前に、先ず関連する文章を翻訳することを要求された。ある期間、私は石川欽一郎の学生であった画家鄭世璠先生に特別にお願いして羅秀芝の日本語教師をして頂いた。しかし、戦前の「古風な日本語」を翻訳することは決して容易な事ではなかった。なかでも石川欽一郎などの文学の典故を交えた散文は曖昧ではあるが面白く、しかし実のところ翻訳は非常な苦痛であった。四年前、『台灣近代美術大事年表』の校正刷りが出てきた頃、私は翻訳を出版する計画を立てはじめた。日曜日に家に帰るときは、必ず宿題を持ち帰り、父の仕事の邪魔をした。父は陳清汾の「巴黎管見」のカフェと酒場の爛れた生活を読んだとき、びっくりして「国はこんな文章を読むためにお前に給料を出しているのか」と言った。いつも私が繰返し言葉の意味を追求するので、父は終いには声を高くして「翻訳は、こういう風にしてするものではない」と言った。父の言う通りで、翻訳の重点は全面的に「意義」にあるのであって、甚だしい場合には「雰囲気」を把握することである。しかし私もまた頑固で、字義を先ず明らかにすること出来れば、その中のさらに微妙な雰囲気は推測することが出来ると考えた。週末の親子の時間だけでは足りず、私は父の会社にまで出掛けたことがあ

った。しかし、このように絶えず訂正を加えた訳文が出版の水準に到達しているかどうか、私には依然として掴めなかった。

一九九九年初夏、あたかも天から神兵が降りて来たように、もと東京国立文化財研究所美術部長の鶴田武良氏が日本交流協会の研究者派遣事業で中央研究院に二ヶ月間来訪された。彼は快くすべての校正作業を引き受けてくれた。そこで次の段階の作業が集中的に進んだ。我々は改めて一篇づつ文章を読み直して行っただけでなく、さらに多くの文章を追加した。それには夏の二ヶ月だけでは足りず、秋、冬と続けて鶴田氏はまた研究院に現れ、作業に没頭した。最後には付録の人名、事項の解説は日本に持ち帰って完成した。同時に本書の全文を中日両文の対照とするために、この七篇の導読をすべて日本文に翻訳することに同意した。鶴田氏の真剣で、妥協しない姿勢が遂に本書をして世に出ることを可能とした。

本書の翻訳、修訂の過程はゆっくりと長かった。ここに収録した中には前に挙げた三人の学生の初稿、またその他の友人、同学の翻訳原稿が入っている。それらは総て文末に注記した。彼らの努力と協力に感謝したい。日本文の中の外来語については、英文、仏文の判明したものはそれを注記した。原文を明らかに出来なかったものはカタカナのまま残した。フランス語を探すに当たっては、国立中央大学の呉方正教授を煩わせた。しかし、見落としがあればその責任は当然著者にある。

本書を完成することが出来たのは、多くの人の熱心な協力によるもので、感謝したい。先ず中央研究院歴史語言研究所の研究環境、国家科学委員会の一九九九年から二〇〇一年にわたる研究補助計画、研究院東北亜区域研究計画、さらに交流協会の東京での一ヶ月の研究助成などである。淡江大学情報工学部の顔淑恵先生と石明金先生はコンピュータによる文字、画像の鮮明化作業の支援に全力を傾注された。研究計画助手黄琪恵と邱函妮のたゆみない努力と励ましは忘れ難い。雄獅美術出版社の李賢文氏の励ましと支持、同社編集王昭華の熱心さと情熱的な仕事、また同社美術編集曹秀蓉の努力が我々の協力を順調にしてくれた。最後にもうひとり、自称竹久夢二ファンの王小美が進んで本書表紙のデザインを引き受けてくれたことに感謝したい。

・謝意を表したい人の名はかなり長くなる。そこには多くの私の先生、学生、友人たちなどが入っ

ている。もしも彼らの鞭撻と暖かい思いやりの忍耐さがなければ研究の道はきつと寂寞としたものであったであろう。今はここで筆を置いて、回憶の空間を次の機会に残したい。

凡例

- 一、本書は上、下二冊に分け、上冊は中国文に翻訳した美術文献百三十七篇及び導読七篇を収める。下冊は日本語文献を主とし、導読の日本語訳文及び名詞解説と索引とを収める。
- 二、各文献の原出紙誌名は、上冊中国訳文では文末に記した。下冊日本語文献では目次に附記した。
- 三、主題三・官展評論の大部分の評論文は、発表時には当該年の台湾展回数を明記していなかった。そのため、本書中国語訳文では閲読の便宜上、標題に展覽回数を加えた。また新聞評論の標題が長い場合は、訳文では簡略にした。
- 四、上冊の図版説明は簡略を旨とし、台湾美術展覽会図録によった図版は略号で示した。例えば台湾一西2は第一回台湾美術展覽会図録西洋画部の図版二を、また府一東2は第一回總督府主催台湾美術展覽会図録東洋画部の図版二を示す。また『台湾日日新報』は『台日報』と略称した。
- 五、上冊で日本語文献を中国文に翻訳するに当たって、外来語は中国文に翻訳したほか、出来る限り欧文原文を注記した。原文を探し得なかった語句はカタカナのまま残した。
- 六、下冊で中国文導読を日本語に翻訳するに当たって、引用原文（日本語）は便宜上、旧仮名遣いを現代仮名遣いに改め、特殊な漢字表記はかなに改めた。
- 七、下冊の日本語文献の大部分はマイクロ・フィルムからの複写によった。原状の趣を保ち、また読み易くするために、必要に応じて版面を調整し、コンピュータ処理を行って汚れを除いた。
- 八、中国語訳文中の西洋画家名はすべて初出のところで原名綴り及び生卒年を注記し、一般的でない西洋人名については簡単な註を附した。中国語訳文中の日本画家、日本人名、絵画団体、美術用語には一々は註を附さないで、下冊の附録・用語解説に入れた。参照して頂きたい。
- 九、原文に頻出する名詞、例えば「内地」は日本を、「本島」は台湾を、「蕃人」は原住民を、「新高山」は玉山を指す。それらは政治的、歴史的背景を有していて現在の用法とは一致し

十、
ないが、翻訳に当っては原意を保留するため、現代用語に改めなかった。
中国語文への翻訳に参加した人、あるいは原翻訳者の姓名は、すべて略称で訳文の末に附した。
略称のないものは編者の訳出である。なお、略称と姓名は次の通りである。括弧内の数字は訳出した篇数である。

王—王淑津(19) 吳—吳景欣(1) 林—林保堯(1) 皎—林皎碧(3) 智—林聖智(1) 黃—黃琪恵(16)
陳—陳才崑(1) 葉—葉思芬(1) 廖—廖瑾瑗(1) 鍾—鍾孟燕(1) 羅—羅秀芝(4)

